

カナダ サスカツーン市から

「さあービールで乾杯！」

ハンバーガーを頬張り、黒ビール？を口にして、ルートビアはビールでないことを知りました。1974年7月の出来事です。アルコールは、政府が管理していて、スーパーでは買えません。リッカーボードストアという専門店で市民は買い、レストランは、許可をもらって、提供していますので、マクドナルドやA&Wのようなファスト・フードの店では飲むことはできません。学校での集会や宴会では、アルコール類は厳禁、他の会館で開く時も、リッカーボードストアでライセンスを買い、ガードマンを雇うという厳しさです。自己紹介をさしおいて、いきなり、飲む話になりましたが、私は戦前（昭和2桁！）に札幌で生まれ、生まれて初めて、太平洋を渡って海外に来たのが1974年7月、そして今なお、初めてのその地で生きています。6歳、4歳、3歳の子をつれて移住し、油が違うのか、何を調理しても食べてもらえない往生したのも、今は懐かしい思い出になりました。文化・言葉・風習の違いに、呆れ、怒り、戸惑い、時には、共通点を見出して安堵しながら、無我夢中で生きて、23年が過ぎました。



リッカーボードストア（お酒を買うところ）

パンクーパーのあるブリティッシュコロンビア州、そして、北海道と姉妹州のアルバータ州、その東隣が私の住むサスカチュワン州です。州土は日本より広いのですが、わずか2百万人しか住んでおらず、一年の3分の2は冬、3分の1は夏という寒暑の烈しいところ

です。それゆえに、風雪厳寒との戦いに追われているところもありますが、零下40℃の日は、サンドックと言って、太陽が虹の輪のように、少なくとも3つは見えますし、日の出が午前9時、日没が午後4時という真冬は、白夜の真夏よりオーロラの見える時間が長いという特典もあります。零下20℃以下の毎日は、住宅街の道路はスケートリンクのようで、市が交差点等の要所に砂をまきますが、目的点30m位手前で、ブレーキを3回踏んで、そろりと停車します。あわててブレーキを踏むと、車はスケーターワルツよろしく、何回転もして、路上駐車の車もまきぞえにしますし、大事故につながることもありますから、皆さん慎重です。

道路幅は広く、対向車は日本にくらべて少ないですが、速度制限は、市内50キロ、市内をとり囲むハイウェイは100キロ、郊外ハイウェイは120キロです。ハイウェイの設計は、中心部が高く、雪が吹きとぶ構造になっていて、真冬は、ハイウェイが一番安全で、速



藤女子大学
人間生活学部講師
高谷 尚子
カナダ サスカツーン市在住



市内を走るハイウェイ（立体交差点を作るのに土を2年ねかせます。）

いです。

零下20℃以下の日の雪は、結晶がはっきりわかるほど乾いて凍っています。積雪も10月末から3月末で合計1.5m位ですが、家の周囲の歩道除雪は、持主の責任です。除雪を怠って、子どもや老人がころび怪我をする大変で、皆、幅広の除雪用スコップを押して、丁寧な人は、その後を、きれいに、箒ではいています。

ウインドチルファクタと言って、天気予報は、温度のほかに体感温度も報道し、風の冷たさから身を守る



小学校前の横断指導は6年生の役目

ことも促します。ウインドチル1,800を超えると実際の温度よりも15℃は低いです。学校は小学校と高校に分かれ、5歳就学で幼稚園から8年生（日本の中二）までエレメンタリースクール、9年生（中三）から12年生（高三）までがハイスクールとなっていて、小学校は午前と午後に20分ずつ休み時間がありますが、戸外の温度が零下27℃以上で、ウインドチルが1,800以下であると、全員外出しなければなりません。ブーツ・手袋・毛糸の帽子とマフラー等、防寒には、親も教師も注意しています。

学校の運営費用は、住民の固定資産税からその75%が使われています。消費税は、国が7%、州が7%で、物を買うと14%とられますが、わが州では、その州税が医療費にまわされ、医療費は無料です。医者も、家庭医を決め、家庭医から専門医に推薦してもらい診てもらうシステムになっています。家庭医は、サスカツーン市の場合、大学病院、市立病院、カソリック病院のいずれかに属し、夜間や休日診療はその属する病院に行き、そこから家庭医に連絡を取ってもらう仕組みになっています。医者の給料も公務員とさせて変わらず、年収、1千万円を超える人は、ごくわずかです。

年収6百万円以上は高給取りに入ります。家は、その年収二年分もあれば買えます。敷地2百坪、家が30坪の二階建が平均で、土地は市からの永久貸与です。10万ドルの家で土地代は1万ドル位です。二階建といつても、どこの家も地下があり、それが地上と同じ広さですから、平屋が多いです。小学校は平屋、高校は二

階建、デパートは四階までで、中心街にあるホテルやマンションだけが十階以上あります。

人間生活に欠かせない物価—電気、水道、ガス、ガソリン、食料費、電話、医療費等—は日本にくらべて安いと思います。暖房は天然ガスを使っていますが、室内は真冬でも20℃以上あり、暖房費は、1ヶ月150ドル位です。電気・水道もまたしかりで、貧乏しても、最低限度の人間生活は保障されているような安心感があります。

歩道から1m入った前庭は市の所有地なのですが、芝刈りは持主の役目で、夏は5日に一度芝を刈ります。冬の除雪も車道への雪出しが罰金ものですから、かなりの労力をしています。それでも市民は当然のように黙々とやり、窓辺の花もカーテンも全て、道ゆく人々を意識して表を向けているサービスぶりは、生活からくるゆとりなのでしょうか。

ボランティアも一つのステータスになっているところがあります。ボランティアから正式採用になることも珍しくない合理主義も持ち合わせています。スーパーの支払の行列にイライラしたり、前の車を追いかけてるようクラクションを鳴らしたりする人をほとんど見るのは、何故でしょうか。

夏の旅行に車は欠かせませんが、随所にレストエリアがあり、ハイウェイに表示が出ていて、のんびり、昼食を取ったり、昼寝をしたりすることもできます。「白夜に、急ぐ旅じゃなし。」という理由だけではなさそうです。

とりとめのないおしゃべりに、あれもこれもと欲ばってしましましたが、人口わずか3千万足らずにもかかわらず、150カ国もの人種が共存する多文化のカナダと、何もかもわかり合っているはずの単一国家の日本の利点を分かち合い、広汎で、真に人間らしい国際社会のユートピアの建設を夢みて、筆をおくことにします。ご質問あらば何なりとお申し越し下さい。



ボランティアによる落葉拾い